

病床に横たわりて

一

「キリキリッ」と時々下腹に痛みがさしこんで来ます。少し楽になると、本部の事や各地の同胞の事が思い出される。病む故に絶対安静を命ぜられた私には、起きることも、ペンをとることも許されませぬ。だといつて命の続く限り、待つて下さる各地の同胞に、月々のお便りを送らないわけにも行きませぬ。止むなく天井を見つめたまま、私は各地の同胞に向つてお話しします。そうしてそれを、松浦に速記してもらつて皆様のお手許に送ります。

光明寺における午前五時起床・午後十一時就寝という酷い三日間の講習会を愉快に元気に済ました私は、一月九日の夕方、豊田郡河内駅に降りました。今晚から三日四晩、光明団河内支部講演会があります。嬉しそうに迎えて下さる中務静磨氏の宅に着いた時はもう日が暮れていました。第一夜の講演が無事に済んで何事もなくその夜が明けて朝五時頃、私は左下腹部に微かな痛みを感じ初めました。大したこともないので朝床を離れると、お客様と話をしたり講演予定を組んだりしましたが、やはり絶間なく下腹が痛みます。腹痛止めの薬をもらつたりして昼の講演に出席しました。禽場は誓享院です。下腹を抑えながら一席話して休憩しますと、大変な痛みを感じます。けれども我慢して、今度は三十分程でやめました。堪えられないので急いで飛んで帰つて床に入りました。その夜からもう講演は出来ません。

しかし一月号の光明の原稿が未だ結びがついていませんので、やつとそれだけさせて痛みをくいしめてほんとうに病床の人となつてしまいました。

二

中務御夫婦や松浦は大変心配して愈々医者呼びました。診察の結果、老医は簡単に「心配はいらぬ。蛔虫腹、蛔虫腹。」といつて帰つて行きました。しかし薬を飲んでも痛みは止まりません。痛むままに苦しい一夜が明けました。

十一日の朝が来ても痛むことに何の変わりもありません。のみならず、昨日の朝から未だに通じがありません。私は病苦と戦うのが精一杯です。周囲の人たちは、大変心配して、河内町の有力なる医師の方々が上京中なので、はるばる二里離れた河戸まで自動車飛ばして、大原先生を迎えて診察を受けさせて下さいました。大原先生は、「別に心配しなくてもいいでしょう。大したことはないと思えますから」とて下剤を服用すべきことをすすめて帰つて行かれました。中務の奥さんは、大原先生の宅に薬をとりに行きました。松浦は講演会に出て行きました。後で私は全く堪えられない痛みにもだえます。下剤を飲んでも、ちつとも効果はありません。こうして苦しい第二日は暮れて行きます。その夜です。痛む中にも心はうとうとと夢幻の世界に沈んで行きます。飛行機に乗つたり絵巻物を眺めたりしますけれども、現実にかえると、

段々ふくれ上つて来る腹と、止み間なく痛む体が横たわっています。こうして病む日の第二日は暮れました。

病は苦行です。そこに力になる何物もありません。ただ現実の苦悩を抱いて、歯をくいしばってじつと堪え忍んでいるより外に道はありません。私は底知れぬ不安と苦悶につれてゆかれます。

第三日の講演は全く中止にしました。痛む腹は少しも休んで呉れません。もう私の体には全く元気がなくなりました。どの薬もちつともきゝめがありません。かうなると、私はただ福山市の中井先生が来るのを待つばかりです。福山市に電話をかけたので夕方には、先生が来てくれます。かねてから私の体は、中井先生にまかせきつてあります。夕方六時半とうとう先生が来てくれました。今や苦しみの絶頂です。先生は丁寧に診察しましたが、その顔は全く曇つてしまひました。私はその刹那私の予想が的中したなと思ひました。三日間も便通がないのだから腹はその機能を失つているのだ。出口のない腹の張方では死を待つより外仕方がないから、山田亮三氏の如く人工肛門を腹の横につけられるのだろう。さて病氣は盲腸炎？ 腹膜？……………。医学上の知識のない私にも、平素見たり聞いたりしたのを綜合して私の病が普通の蛔虫や腹痛ではない、きつと大手術を要するに違いないと決心していました。診察をすませた中井先生は何か決する所があるらしく、三原町の平田博士に來診を求めて電話をかけました。「河内町には手術室のある医院がありますか。」と中井先生が言っているのが聞こえます。愈々手術だな、と思ひました。

2

四、

私は中井先生を待った。

ひかれるように待った。

先生が来たら解決する。

私の体の全部をまかせきつてゐるその先生が来た。

私の体の一つ一つの病状すらが先生の全体を動かす。

単なる医師として単なる患者を見るのとはちがう。

先生の心に浮かぶものは何？

「しまった！ 殺したかも知れない。手術！ 結果不良……………やがて……………死

……………

もし殺したらどうする！

光明団はどうなる それは亡んでも仕方がない。住岡一家をどうしよう！」

そこまで考えて下さる時、

「これか、これはあたりものじゃー！」

それ位な簡単な考え方でおかれようか。

ふくれあがつた腹、三日間通じない腹、三日痛み通しの腹、

それを見た先生の顔は暗い。

しかし私は一切を覚悟した。

そうして先生に一切をまかせた心安さを感じた。一命はもちろんのこと、一家の運命まで考えに入れた責任感、その中に一切をゆだねうる私は幸福であった。何で易々と薬がもらえよう。

どうして軽々しくメスが腹にもつてゆかれよう。そこに医師の苦悩がある。

中井先生は今尊きその苦悶の中におちる。

沈黙数分……………

「三原に電話をかけて下さい。そうして平田博士をよびましょう」
中務さんが電話を三原にかける。

平田博士が来られる。そうして中井先生の診察に確信が出来る。

すぐ岡山医大の泉博士に電話がかけられる。

明日は日曜である。泉博士は午前中に来てくれる。

そうしていよいよ開腹手術が行われる。

それが先生の心に描かれた予定であった。

五

中井先生は、温いお湯でお腹を温める様に命じました。

それから、二三十分黙した不安な空気が続いている時のことです。急に通じの無かつた私に、僅かなガスがもれました。

「オヤッ」とみんなの注意は、新しい目を見張って私の上に注がれました。それから続いて二回三回とガスが出ました。

この出来ごとが中井先生をはじめ皆の者をどんなに喜ばしたでしょう。ほとんど全ての悪い予想と予想とを一掃してしまう程に大きなショックを与えられたのでした。もう平田先生に来て貰わなくてもいいときさえ中井先生が言います。けれどもその時は平田先生は三原を出発した後でしたから、やや愁眉を開いて先生を迎えました。中井先生と平田先生と二階で話している間に、私は便を催して二日半日ぶりにはじめて快い通じを催しました。平田先生は丁寧に診察して帰って行かれました。その夜中井先生は泊つて下さいましたが、先の心配の種は笑いの種となり、中務夫妻をはじめ一同の間には心からの喜びが溢れました。特に責任を一身に引受けている中井先生は衷心から嬉しそうです。けれども私の腹痛が全く止んだものではありません。大嵐の後の様な乱れと、全くこわされた力のない私の腹には、時々きるような痛みを感じます。

絶対安静を命ぜられたまま、眠られぬ夜は次第に更けて行きます。私の両側には、中務の奥さんと松浦とが、帯紐とかずに看護していてくれます。夜が明けると中井先生は、診察時間に間にあうように朝の汽車で福山に発たれました。

六

十三日、私は流動物を少しつつ戴きはじめました。お腹の痛むことに変りはありませんけれども、大手術を受けることや、死を免れた私は様々な思いに連れて行かれず。

夕方になると福山から中井の奥様と山田亮三氏が見舞に来てくれました。山田氏は様子を言つて夜行で帰りましたが、奥様は留つて介抱して下さいます。私は大病を病んだ経験がありません。つくづく過去をふり返る時、病人に対する私の冷たさと不親切を恥じないではいられません。病氣は厳しい厳しい苦行です。誰も代ることも出来ねば、わたすことも出来ない。ただ背負つて苦しまなければならぬ厳しい苦行です。病氣になると心が尖つて来ます。そうして小さい事にもよく腹が立ちます。人の心の底まで見てとります。病む日に心からなる真実を捧げられる程、胸にこたえる事はありません。義理でもなく、務めでもなく、我が身を捨て、私のためにつくして下さる皆様の御親切は、私を合掌の心にまで連れて行きます。

十四日の朝十時過ぎ本部から母が駆けつけてくれました。

私の体はやはり痛みます。しかし快復に対する希望と病む体のじれつたさを感じないではいられません。

夕方になると、中井先生と山田氏と二人が来られました。そうして私の体を何時福山に運ぶかについて相談せられた結果、明十五日朝でもさしつかえなからうということになりました。中務夫妻は、せめて数日もつと体が調うまでここにいてくれと哀願する様に言つて下さいます。その夜中井の奥様と母とは福山に出発しました。

十五日朝、起きて立つてみれば、ふらふらするけれども立たれます。中井先生と中務静磨氏と松浦等に助けられて人力車から汽車にと移りました。二等車の中に横臥しましたが幸いに体にはちつとも障りません。福山駅につくと、奥様などに助けられて自動車によつて中井医院に着きました。

私の体は今身も心も投げ出して、気長く憩ふ事の出来る、何時もの私の部屋に静かに横たわりました。

七

冬の日には慌しく暮れて、今日も一日又過ぎて行きます。今日は、親鸞聖人のお逮夜です。幼かった頃から来る年来る年の今宵が思い出されます。安芸の国ではどんな人も今晩は寺に参ります。大蠟燭が幾本となく、赤々とともされた本堂では祖師聖人のみ徳が讃えられます。病む体とはいえ、起き出でて礼拝することの出来ぬ私は、相済まぬことであります。寝床の中に合掌して静かにみ名を呼びます。親鸞聖人は私にとつては如来応現としての唯一の方であります。

もし私が病氣でなかつたならば、今晩は加計町の栖心寺で講演をしているはずで、加計地方の同胞たちがどれ位力を落としてくれたことでしょうか。相済まぬことです。そぞろ各地の同胞たちを懐しまずにはいられません。

「婆婆永劫の苦を捨てて 浄土無為を期すること

本師釈迦の力なり 長時に慈恩を報ずべし。

如来大悲の恩徳は 身を粉にしても報ずべし

師主知識の恩徳も 骨をくだきても謝すべし。」
静かに合掌してみ名を呼びつつ、限りなく聖人の御心を戴きます。
病む体は、なおしてくれる力に任せつつ、静かに横たわるより外に仕方ありません。如来の願力にお委せして自然法爾に救われて行く嬉しさを、病む日殊に厚う感じます。又しても、うとうとと夢の世界に私の心は落込んで行きそうです。

八

十六・十七……………二十一日。もう今日は二十一日であります。中井に帰ってから一週間たちます。お腹の痛みは未だとれません。昨夜は二時頃から七時頃まで殆んど眠らないで苦しみました。七時から九時頃まで、ぐつすり寝込んだ後は幸ひに痛みも未だ出ません。複雑な病状と、はつきりしない傾向のために、治して下さる先生も困っていられます。この様子では当分待つていて下さる皆様にもお会い出来ないと思うと、堪えられなく感じます。

福山市内の同胞たちが心配して訪ねてくれます。それと会う事が何よりの嬉しさです。あまり語れば体に障り、何かに感動すると脈が上ります。しかし心配しないで下さい。心から親切なる介抱と到り届いた治療の中に、私の病は委せきつてあります。今日からは、おかゆを少しづつ戴きます。

(二十一日夕方、福山市船町中井医院にて)